

学会名

第32回日本慢性期医療学会
(2024年10月14日～10月15日)

研究テーマ

患者の主観的幸福度向上のための「笑い」を取り入れた活動の報告

病院名

医療法人社団健育会 石巻健育会病院

演者

○佐藤和(看護師)
武山裕美子(看護師) 小山友紀(看護師) 津田佳代(理学療法士)
津田純(作業療法士) 小野寺泰弘(作業療法士) 高橋奈穂子(介護福祉士)
平塚由美(介護福祉士) 佐藤寿恵(介護福祉士) 太田耕造(医師)

概要

【背景・目的】

コロナ5類移行後もマスク生活が続き、笑顔を見る機会が少ない現状が続いている。そのため、患者の入院生活に「笑い」を取り入れる活動を行った。

「笑い」には身体的・精神的効果があり、「笑顔に似た表情」を作ることによって脳内のドーパミンが活性化されるといわれている。

2023年度の取り組みでは一定の効果を確認したが、実施した患者数が少なく、「笑い」の有効性（主観的幸福度）の検証には至らなかった。

そこで、患者の主観的幸福度向上を目指し、「笑い」の効果をさらに探究するためTQM（Total Quality Management：品質管理）活動として取り組んだのでその成果を報告する。

【活動内容】

1期間：2023年12月～2024年5月

2対象：A病棟の入院患者30名

3方法：QC手法を用い施策実行型の手順で実施した。

1) 「笑い」の介入方法と効果について再学習する。

2) 患者にパンフレットを見ながら1日2回、1回5分程度「笑い（表情筋ストレッチ）」を2週間毎日実施する。

4調査内容：

1) 基本情報：年齢、性別、入院時HDS-R、患者の傾向（怒りっぽい、寂しがる等）

2) 患者の主観的幸福度はビジュアル・アナログ・スケール（以下VAS）にて数値が大きいほど幸福度が高いと評価し、患者の客観的幸福度はバイタリティ・インデックス（以下VI）にて評価する。それぞれ介入期間前後に測定する。

5活動目標：

2024年4月末までに患者の主観的幸福度が「笑い」の介入後向上する。

【結果】

患者の平均年齢は87.2歳、「笑い」の介入後、VAS（主観的幸福度）が向上した患者は30名中22名（73%）だった。介入前後の比較では、介入後VASは有意に向上（ <0.01 ）した。

VASとHDS-Rの関連については有意差はなかった。怒りっぽい患者7名、食欲がない患者6名は、介入後VASが向上していた。

VIは排泄以外の項目（起床、意思疎通、食事、リハビリ・活動）及び合計点数が有意に向上（ <0.01 ）した。

【考察】

「笑い」の介入は、患者と向き合う1対1の貴重な時間である。制限ある入院生活の中においても、患者と共に笑い、時間を共有することが、患者への愛情ある親身な対応になると考える。こういった取り組みは幸せホルモンの分泌に影響した可能性が考えられる。「笑い」の介入は、患者の主観的幸福度の向上に効果があると示唆された。

【今後の課題】

患者に対する「愛情を持って親身な対応」として、この活動を院内で標準化し取り組みを継続していくことである。